

神のおとずれ

日本聖公会 神戸教区報



2018年
1・2月号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<http://www.nskk.org/kobe/>

発行責任者
司祭 小南 晃

印刷所
文明堂印刷所

目覚める時は、今

司祭 セバスチャン 浪花 朋久



私がまだ学生だった頃、何人かの方々と車で旅をしたことがあります。メンバーの中で私が一番若かったこともあり、私以外の人が運転している時に寝るのは失礼だと思ったので、ずっと起きていました。私が一番後ろの席で、呆然と景色を眺めていた時のことです。運転されていた方がルームミラー越しに私を見て、「おい、浪花が寝ている。一番若いのに、失礼な奴だ。」とおっしゃいました。「私、起

きてますよ？」と返答すると、運転席と助手席の方々はビックリ。「お前、それで目が開いてるのか？」。想像もしなかった一言に思わず「パッチリ開いてますよ！」と声を荒げてしまいました。ご覧の通り、私は人よりも細目のため、起きていても眠っているように見えるようです。ご安心ください、開いてますよ！

目を覚ましていなさい

自分で目を覚ましているように思っている、他者から見れば眠っているように見える。これが一つの現実なのです。

「目を覚ましていなさい」主に「目を覚ましていなさい」とよく語られます。この「目を覚ましていなさい」とは、「24時間寝ずに起きている」ということではなく、「油断しない」という意味を表すことがあります。目を覚ましていられるのに、眠っているように見える。これが神様から見た人間の姿です。つまり、私たちは正しい事を行っていると思っても、神様の目から見ればそれは間違いだ、ということもあるのです。私たちは、この「間違い」に気づかず、人生を歩んでしまい、正しく歩んでいたはずが上手くいかなくなると感じる場合があります。また、その原因を知ることが出来ず、もがき苦しんでしまうこともあります。これが眠っている状態、そして油断している状態でもあるのです。

食事による目覚め

ある方が子宮癌を再発しました。抗癌剤治療を行うことになった時、主治医から「これが最後の治療になります。」と言われました。主治医からの通告は、彼女にとってまさに未来に期待できない宣告となったのです。その後、彼女はご主人の勧めもあつて在宅ホスピスを始めることにしました。しかし、今まで自分が生活していた家にながらも、思うように動けないことへの苛立ちや病気のために食べたいものが食べられない事への苛立ちなどもありました。食べることは、彼女にとって「生きる」証拠だったので。家族の中で、食事への知識や調理方法は専業主婦であった彼女が一番の経験者です。しかし自分ではもう食べたい料理を作ることができません。彼女は「食べる」という生き甲斐すら失いかけてしまいましたが、自分ではどうすることもできません。しかし、このことを悟った家族と訪問看護師は、彼女が少しでも食べられる食事を提供できるように、管理栄養士の助けを借りることで、彼女が食べたい食事を提供することにしました。家族と共に食事をする事で、生きる希望を持って欲しかったからです。そして家族の助けによって、彼女は家族と食卓を囲むことができ、それによって会話がはずみ、食べたい料理が食べられる事への喜びを感じるようになり、更には生きる希望を見出せるようになったのです。医療や自分の経験だけではなく、家族の助けの中にこそ、彼女が目覚める場所があつたのです。

目覚めるときは、今

神様の救いは私たちの生活の中に必ず存在します。しかし私たちは、ピンチの時に自分の力だけを頼りにする「眠っている」状態から抜け出せず、その「救い」を見逃がしているのです。そんな時にこそ、他者から助けがあることを信じてください。誰かに頼ることは弱いことではなく、神様に頼る「目を覚ましていなさい」時なのです。私たちは誰もが神様によって弱くても強く生きていけるのです。目覚める時は、まさに今なのです。

(浜田基督教教会副牧師)